令和3年1月発行　第53号　発行：京都府立林業大学校（隔月発行）

京林大だより

No.53

第五回林大祭を開催しました

昨年の12月６日(日)に、地域及び林業関係の皆様と林業大学校との交流を目的とした「第五回林大祭」を開催いたしました。

当日は、松ぼっくりや枝を利用したリースやクリスマスツリー作りの木工教室、手作りの丸太椅子やまな板などの木工品販売、ロープワークを駆使した木製遊具、薪割り体験や木製のコースター使ったオセロゲーム、近隣の商店様による模擬店等々、概ねこれまでのスタイルを踏襲した内容ではありましたが、特にトラブルも無く無事に開催することができました。

今回の林大祭は９期生16名が企画・運営いたしましたが、特に苦労したことは、コロナ禍の影響を大きく受けたことです。開催が決まらずに準備期間が短くなったうえ、模擬店の出店交渉も難航するなど、例年とは異なる困難な状況でありましたが、８期生の先輩方の応援もいただきながら、何とか間に合わせることができました。

コロナ禍の悪影響を心配していましたが、快晴の元で250名余りの方にご来場いただいたこと、地域の方からの労いのお言葉や遊具や体験コーナーでの子供たちのうれしそうな顔を見て、開催できて本当に良かったと感じるとともに次回に繋げることができて大いに安心いたしました。

ご来場いただいた皆様、模擬店等にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

京林大学生自治会９期生

（模擬店等協力者：「七福堂」「MADOI」「樹々の会」「つみ木家具店」「木好 七郎左衛門」「道の駅 和」（順不同、敬称略））

クリスマスに向けたリースづくり

無煙炭化器による焚き火

木製コースターを使ったオセロゲーム

葉っぱの下敷き作り

屋久島研修

世界の森林・林業を学ぶことを目的に当校が毎年行っている「ドイツ研修」。春に一度は延期としたもののコロナ禍のため秋になっても海外渡航の目処が立たず、実施することができないこととなりました。

そこで、今年度は国内の「世界自然遺産」、屋久島を訪れることとしました。訪れたのは12月中旬、寒波南下の影響で南の島であるにもかかわらず非常に寒く、また年間降水量が約4400mm、降水日数も多い島のため、研修の際もほぼ毎日雨が降り、縄文杉がある標高1300m地点に到着したときは、雪がシンシンと降っていました。

その大量の雨と特殊な地形が形作る森林は、京都とはひと味違っていました。縄文杉を筆頭に樹齢千年を超える屋久杉と呼ばれる巨木群。切り株の上に落ちた種から出た芽がそのまま生長し、株上で更新する木々。

国内の森林の素晴らしさを改めて感じる研修となりました。

今回のトレッキング最終地点：縄文杉

今月の授業参観

『1㎥はい積みチャレンジ』

木材の量を表す単位は「㎥」(立方メートル)です。丸太の取引など木を扱ういろいろな場面で使います。

京林大では1年生「高性能林業機械操作士搬出システム実習」の授業で重機を使って木材仕分けを行い、運転席から見た「目分量1㎥」の正確さを競っています。挑戦者（運転手）は山から到着した丸太をグラップル(木材仕分け機)でつかみ、1㎥と思う量を計測スペースに移し、待機していた学生が電卓を使わずに材積を計算します。2回チャレンジして1㎥に近い数値を競います。

今年の優勝は山口大介君の0.988㎥でした。彼は4m材なら直径20cmが6本、という目安を持ってチャレンジしました。

グラップルによる仕分け作業

校長室より

なぜ　里山保全？

校長　只木良也

昨年12月6日、林大祭と併行して、林大の教室では、南丹・京丹波林業振興展実行委員会主催の、京丹波森林スクール2020「地域から考える　森林・林業の未来」と題するトークセッションが行われました。4名の話題提供者から、後継者、森林管理、地元の歴史と文化との関連など、問題の提起があり、地元丹波の森林・林業・農山村のあるべき将来の姿などについて熱心に論議されました。

それは、限界の見え始めた都市型消費社会から、農山村・里山の循環型社会に復帰あるいは知恵を借りることであり、そうした運動は世界的にも拡大しているところです。このことは、本欄でも折に触れて扱ってきました(→47号、2020年1月)。

いま全国に、里地里山保全を標榜する団体は数多いのですが、まず里山を「遊休地」視した開発行為から守ること、そしてその具体的な活用ですが、それらには、その理に適い、説得力のある理由付けが必要です。

それについて、私は次の3項目を想定しています。

1）環境保全機能論的に

森林の様々な働きのうち、とくに人間生活近隣に存在する里山らしい役割・用途、例えば、気象緩和・水源・防災・景観・保健休養などを焦点として期待するものです。ただし、これら主となる機能以外に、森林は他にもいろいろな効用・機能を兼ね備えていることも忘れてはなりません。

2）生態系論的に

自然界は、相互に影響し合っている小生態系の集合体です。従って、都会の近くの里山の物質循環に準拠した正常に近い生態系の働きが、移入・消費型の不完全な都市生態系を補完してくれます。

3）文化論的に

里地・里山は、それぞれの地域における風俗・宗教・習慣・思考などの母体であると言えます。森林国・日本での農地開発は、森林を潰すことから始まりますが、その農業の主体は、斜面を登ることが不得手な水田稲作。そのお陰で山の斜面に森林が残り、残された森林(里山）が、水田に水と栄養物を、農家に各種資材と燃料を供給してくれたのでした。

里山の放棄は、日本文化を自ら無視し切捨てることではないか、と憂慮し、その保全を図りたいのです。

編集・発行 京都府立林業大学校 〒629-1121 京都府船井郡京丹波町本庄　TEL.0771-84-2401　FAX.0771-84-0797
ホームページ：http://www.pref.kyoto.jp/kyorindai/　E-Mail: kyo-rindai@pref.kyoto.lg.jp